

花壇苗栽培における被覆複合肥料施肥法

[研究のねらい]

近年、花壇苗の生産面積及び生産農家の増加が著しくなっています。花壇苗では高品質大量生産が問われるため、個々の技術をいかに省力化するかが重要です。そこで、施肥機（写真1）の利用が可能となえ、花壇苗が肥料切れなく消費者に届く追肥法として、被覆複合肥料（以下ロング肥料）の培養土表面施肥法を開発します。

[研究の成果]

- ①ロング肥料を表面施用した場合の窒素溶出量は、培養土内に混和した場合とほぼ同等です（図1）。また、ポット培養土内無機態窒素は施用量と共に上昇しますが、140日タイプでは十分な施肥効果が現れるまでに約10日を必要とします（図2）。
- ②ロング肥料の施用量と共にニチニチソウの生育は良くなりますが、20～30粒/ポット施用では、ほぼ同一の生育を示します（写真2）。

[成果の活用面・留意点]

- ①被覆複合肥料の表面施用は施肥機を利用できるうえ、移植直前に施用するため、培養土保存（輸送）中の溶出を考慮する必要がなく、効率的、省力的な施肥法です。
- ②栽培品目、栽培時期、肥料入り培養土の使用等により、溶出タイプ、施用量を変える必要があります。

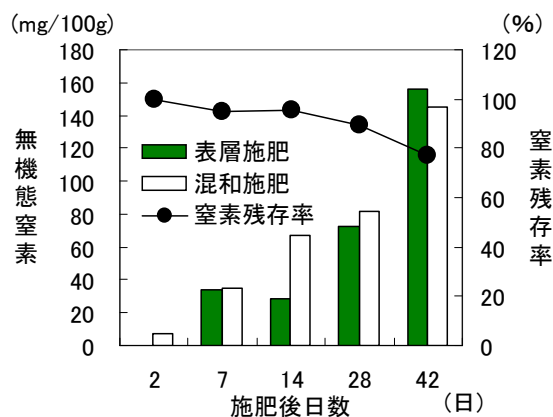


図1 被覆肥料の施肥法と無機態窒素溶出量

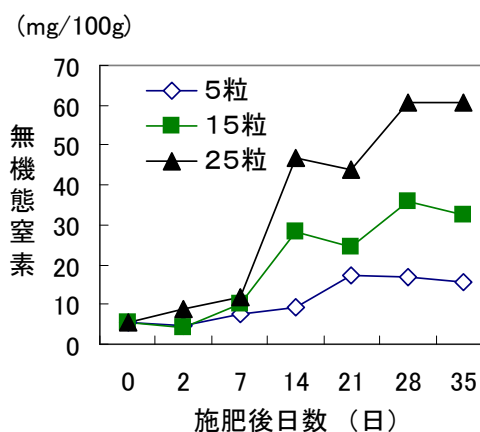


図2 かん水を繰り返した場合の被覆肥料表面施肥量とポット内無機態窒素含量



写真1 施肥機を利用した表面施肥状況

←
容器から落ちる肥料の量とポットを送る速度で施肥量を設定します。



写真2 被覆肥料表面施用量による生育変化

実施年度：平成9～11年

担当者：久保浩之、藪野佳寿郎、平田滋、島浩二、妹尾明枝